

連載 福聚山史

第7回
及川一重一編

古記録に見る常円寺

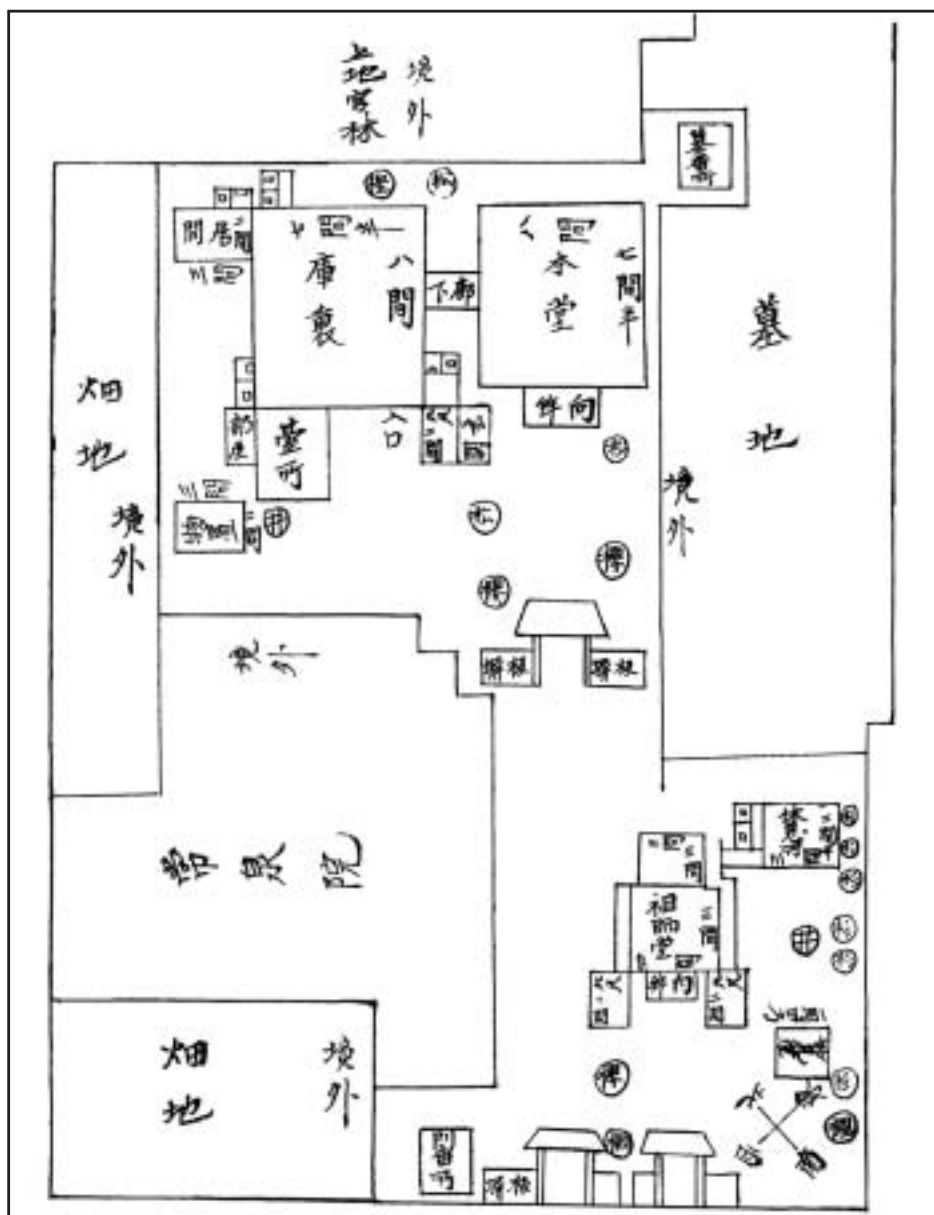
3、『御府内備考』に見る常円寺

〔江戸時代最盛期の常円寺〕

東京都古文書館に現存する明治十(一八七七)年調製と書かれた資料、東京府文庫『日蓮宗明細簿』の常円寺の項によると、本堂は宝暦年間(一七五一〜六四)に第十七世の日清上人によって再建され、また、庫裡は宝永七寅(一七一〇)年に第十一世の日蓮上人によって再建された。と記述してある。その庫裡再建から百六十年、本堂再建から百二十年程経過した明治十年の常円寺は、その間近で起きたであろう幾度かの火災、また安政の大地震に遭遇したにも関わらず、加えて幕末維新の大動乱期を乗り越えて、大きな変化もなく明治期を迎えていることが分かる。その常円寺の姿には驚異さえ覚える。ゆえに、『御府内備考』・『続編』、つまり『文政十年寺社書上』に見られる、常円寺に関わる諸々の物も、当然明治十年になっても現存していたに違いない。現代と違って時の流れが穏やかな江戸時代、おそらく常円寺内部にも大きな変化はなかったのではないだろうか。

この項では、明治十年の『日蓮宗明細簿』の「常円寺境内見取り図」を中心に、それ

より三十七年前の天保十一年に常円寺の全景を描写した『絵入東都本化道場記』(前回掲載)さらに遡ること十三年の文政十年に記録された『文政十年寺社書上 常圓寺』に添付された『境内見取り図』などを参考に、



明治10年 日蓮宗明細簿より

のと何ら変わっていない。また、表の塀も文政三年に改築された通りの板塀となっている。祖師堂の位置や広さも変わっていないようだ。ただし、その明治初年と江戸時代後期の見取り図を比較して変化があ

る所もある。一つ目は、祖師堂の向拝の下の両脇に間口九尺奥行二間の建屋が付属している。これは江戸時代も後期に向かうに従って、祖師信仰が高まり、常円寺においても祖師堂がより充実していった証左と考えられる。二つ目は、客殿(本堂)向かって右にあった妙見宮が祖師堂の右脇に移動し妙見堂(一間四方)となっている。三つ目は、間口三間奥行二間半の休息所が祖師堂の右奥に接続されている。この休息所は恐らく文政三年の『地古跡寺社帳』に記載してあった表門付近の庵室を移築したものと思われる。四つ目は、文政年間に客殿と呼ばれていた本堂の大きさが八間四方となっているが、間口八間奥行七間半となっている。五つ目は、庫裡の大きさが間口八間奥行十間となっているが、間口七間半奥行八間と狭くなっているが、本堂・庫裡とも広さを

測る上での計測上の問題であって、建物が立て直されたのだとは考えられない。また、本堂と庫裡は渡り廊下によって結ばれていたようだ。次回は江戸時代にあった建物や仏像などを紹介してゆきたい。(つづく)

江戸時代の常円寺の建物(伽藍)の移り変わり、また、什物(寺所有物)の存在について明らかにしてゆきたい。

青梅街道の南に面した惣門・路地門・寺中常泉院・中門・本堂・庫裡の位置は、明治十年の見取り図と『文政十年書上』のもの

と一致している。また、表の塀も文政三年に改築された通りの板塀となっている。祖師堂の位置や広さも変わっていないようだ。ただし、その明治初年と江戸時代後期の見取り図を比較して変化があ